【ドバイ 2019 世界パラ陸上競技選手権大会・第 6 日（11 月 12 日午前）】出場選手コメント

◆男子 100m　T46/47　準決勝

・鈴木　雄大（日本体育大学）

世界選手権の大きな舞台で、100m を予選、準決勝と 2 本走れたのは、これからの陸上競技に活かしたい。海外勢は速いなと思ったし、もっと努力が必要と思ったが、この差が埋まらないとは思わないし、あきらめる必要はないとも思った。

100m のタイムが上がれば、走り幅跳びの助走も伸びてくると思う。今は 100m と走り幅跳びをやっているが、今大会を通して 2 種目だとどちらも中途半端になると思うので絞ることになるかもしれない。

・石田　駆（愛知学院大学）

100m は本職でなく、順位も満足のいくものでなく悔しいが、準決勝まで来られたことは褒めて、今後のパラ競技につなげていきたいと刺激になった。スタートも大きな失敗はなかったと思うし、前半突っ込んで、後半も伸びるように意識したが、周りとのレベルに向き合えていなかった面もある。一つ勉強ができた。専門の 400m については後ろから追いついてくる選手がいることを想定して（競り合いの）練習をしたい。

（パラに転向して）どの選手も障がいを持っているが、自分の体に障がいがあることを責めずに、大きな目標をもって国内選手も海外選手も同じような思いをもって、自分も同じようなことを実感している。始める前と初めてから、モチベーションが大きく変わったと思った。

◆女子 100m（T64）　予選

・中西　麻耶（うちのう整形外科）

（走り幅跳びの翌日で）寝る時間もリカバリー時間もなかったので今日の結果に出たと思う。ケガをしないように、丁寧に行き過ぎたかもしれない。上体が浮きやすいくなり、地面をしっかりと捉えられなくなってしまうタイミングがあったので、それは今後の課題。

スプリント力もつかないと跳べない部分もあるので、13 秒台を出せるようしっかり練習したい。「6m を跳ぶ」と「金メダルを取る」という両方の目標がある。無謀な夢かもしれないが「自分のやれることを尽くして、しっかりと 6mを出して行こう」ということが見えた大会だった。

・髙桑　早生(NTT 東日本)

（走り幅跳び明けで）厳しいスケジュールなのは皆、同じ条件。私は今シーズンを総括するようなタイムだった。まだまだ練習が足りないと思った。

スタートはしっかり出られたが、そのスピードを活かしきれなかった。それはずっと課題にしていることで、ここを早くクリアにしないと、決勝という舞台はどんどん離れていくのだなと、今日のレースで実感した。

私の場合、「パラリンピックに出て当たり前」と思われているかもしれないが、出場権を獲得することはそんなに簡単じゃないと、私自身、思い直した。これからは残されたチャンスで、できることを考えたい。来年のことよりも、まずは目の前のことを整理していきたいと思わされた大会だった。

可能性を考え、走り幅跳びのほうにウエイトを置きつつも、私は「走ること」にずっとこだわってきたので、そのこだわりはなくさず、ジャンプにも生かしていきたい

◆男子 400m(T54)　準決勝

・鈴木　朋樹(トヨタ自動車)

楽しかったです。結果として 400m は決勝には進出できなかったが、800、1500 で勝つためには、400mで準決勝にはいかなければいけないと思っていたので、それは達成できた。これだけスケジュールが詰まっているなか、800m と、1500mで決勝を走ることができこれまでで一番きつい世界選手権になったと思う。でも、東京パラを控え、最終日にマラソンがあることも分かっているので、そういう意味でのペース配分もできたし、きつい中でもリカバリーして次の試合に臨むことができたので、今の力を 100%出せたと思います。

2020 に向けては、すでに練習スケジュールは組んでいる。あと 1 年でどこまで行けるかわからないが、最大限の準備をしたい。マラソンも走るが、メインはトラック。
もちろん、両方でメダルを狙っていきたい。

（コメント協力：星野恭子）